

山口市総合教育会議 会議録

審議会等の名称	令和 6 年度山口市総合教育会議
開催日時	令和 6 年 1 1 月 2 1 日（木曜日） 1 5 : 0 0 ~ 1 6 : 5 4
開催場所	山口市役所会議室棟 A 会議室
公開・部分公開の 区分	公開
出席者	山口市長 伊藤 和貴 山口市教育委員会 教育長 藤本 孝治 委員 山本 晃久 委員 佐々木 司 委員 横山 洋之 委員 佐藤 真澄 委員 角川 早苗 委員 鮎川 友子 山口市立大歳小学校 校長 岩政 浩二 山口市立大内中学校 校長 加藤 高広 山口市立大内中学校 教諭 中川 真治
欠席者	なし
事務局	総合政策部長 吉村 計広 総合政策部次長 高村 永悟 企画経営課長 宮原 尚規 こども未来部長 藤井 正治 教育部長 宮崎 知彦 教育部次長 石津 美香 教育総務課長 石川 暁男 教育施設管理課長 宮崎 明 学校教育課長 上田 幸一郎 社会教育課長 原田 和之
議題	【次第】 1 会議 （１）市長挨拶 （２）会議 ア 取組説明（テーマ：不登校への取組について） （ア）山口市の取組（学校教育課） イ 小・中学校における取組 （ア）大内中学校（ステップアップルーム事業） （イ）大歳小学校（フューチャールーム事業） （３）意見交換

内容	会議開会（１５時） ○宮崎教育部長 それでは、定刻となりましたので、始めさせていただきます。ただ今から、令和６年度山口市総合教育会議を開催します。私はこの会議の進行を務めさせていただきます、教育部長の宮崎です。どうぞよろしくお願いいたします。 初めに本会議の主催者であります、伊藤市長がご挨拶を申し上げます。 ○伊藤市長 それでは、会議の開催に当たりまして、一言、ご挨拶を申し上げます。 ～挨拶～ ○宮崎教育部長 ありがとうございます。ここで出席者のご紹介をさせていただきます。本日の出席者につきましては、大変失礼ではありますが、お手元に配布しております、名簿に代えさせていただきます。どうぞ、ご了承ください。 それでは、会議に入らせていただきます。 今年度のテーマは、不登校への取り組みについてです。まず、学校教育課から本市の取り組みについてご説明します。次に大内中学校のステップアップ事業、大歳小学校のフューチャールーム事業についてそれぞれ、ご説明をいただき、その後、意見交換に移りたいと思います。 それでは、まず、学校教育課から説明をします。お願いします。 ○吉村主幹 それでは、失礼します。山口市教育委員会、学校教育課の吉村と申します。よろしくお願いいたします。 ～山口市の取組を説明～ ○宮崎教育部長 ありがとうございます。つづきまして、ステップアップルーム事業につきまして、大内中学校、よろしくお願いいたします。 ○加藤校長 本日はよろしくお願いいたします。 ～大内中学校におけるステップアップルーム事業の説明～
----	--

○宮崎教育部長

大内中学校さん、どうもありがとうございました。それでは、続きまして、フューチャールーム事業ということで、大歳小学校の岩政校長先生、よろしくお願いいたします。

○岩政校長

よろしくお願いします。

～大歳小学校におけるフューチャールーム事業の説明～

○宮崎教育部長

どうもありがとうございました。学校教育課、大内中学校、大歳小学校の取り組みということで、説明をいただきました。これから意見交換の時間とさせていただきます。お時間は大体20分程度というふうに考えております。どうぞよろしくお願いします。どなたからでも結構です。コメント、質疑、御意見等ありましたら、御発言の方、お願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

○横山委員

実はおととい、川西中学校に学校訪問に行かせていただきました。授業を見させてもらったのですが、話は不登校の話になりまして。川西中学校の場合には、コーディネーターさんにすごくよく動いてくれる方がいるということで、お話をお聞きしました。今みたいに、まだ学校まで来られないという、家からも出られなかった子どもさんをコーディネーターさんが、例えば嘉川の交流センターで、一緒に料理を作ったりということで、今のところ、交流センターまでは来れるようになった。学校にはまだもうちょっとかなという、その時が一番大事な時で、これは家に帰ってしまうと、また時間がかかってしまうので、ここをどういうふうにつなぐかと、一生懸命、校長先生も、教頭先生も、お話をしていただいたのですが、やはり学校と地域とつながるのがコーディネーターさんとすれば、地域と家庭をつなぐのが民生委員さんとか自治会の方とか、そういう形でいかに、まず家庭の中で閉じこもった子どもをどういうふうに家から外に出すかというのを、担うのが地域の方々。そして今、校長先生と中川先生が言われたように、学校としては、学校と地域とのつながりが大切と、今言われたのですが、地域に持って来て、そこで、何と言いますか、大人と一緒に遊ぶという言い方は変ですが、そこに持っていくことが、私は、大事なことだなと感じた次第です。

○宮崎部長

ありがとうございます。第一歩ということですか、そういうところにどういう取り組みをされておられましたか。

○中川教諭

そうですね、まずは校内の体制づくりというのが一つあると思います。チーム学校の学校力が上がらないと、担当者一人で奮闘してもそれは持続可能な形にならないので、先ほど、岩政校長先生が言われたように、非常に教員忙しい中ですが、その中でも、やはり担任とその生徒の絆を切らない。そういう取り組みが大事だと思います。それから学校側の、やっぱり本当に行きたくなるような学校でないといけないのという、その一番の基盤づくりをまずやって、その上で、地域との連携を少しずつ、進んで来ているのかなというふうに思います。本校でも、民生委員・児童委員さんとか来られるようになりましたし、そこですごく守秘義務とかいろいろな問題もあるかと思いますが、一歩ずつ、そういった連携を深めていきたいというふうに考えております。

○宮崎部長

ありがとうございました。大歳小学校さん、ないですか。

○岩政校長

はい、本当にケースバイケース、一人ひとりが全て要因が違うということが、一番の難しさなのだなというのが実感しています。その状況をどのように、我々が戻って、どういう一手を打つかというところが、一番肝要かと。例えばでいえば、一つ今やっているのが、家児相の社会福祉士さんと医療機関、このつながりができて、今ようやく家庭から一歩が出られたというケースも実はあります。ここは学校も情報をもらいながらも、なかなか一手が打てない状況の中に、いかにそういった方々が力を貸してくださるか、一緒に同じベクトルでできることをやっていけるかというところは、一つ大きいところかなと思います。

○宮崎部長

ありがとうございます。横山委員さんのご意見、関連する内容、あるいはまた別の切り口でした。山本委員さん、お願いします。

○山本委員

先日、大歳小学校に学校訪問させていただいて、今の説明を伺いまして、一番に感じたのは、やっぱり校長先生のパワーですね。スタンスの軽さと、そういうものが無いと、おそらく実践ができないだろうなと。それは大内中学校の今の発表をお聞きしてもそうなのです。そのスタンスの軽さがすべての校長にあるか

というと、そうは思えない。そうすると、どういうふうにこれを、市内に、全市内に展開するといいいのかなというのが、はなはだ疑問なところがあります。しかし、そうはいっても、その大歳小の実践をお聞きするに、この校長先生が、おそらく駆けずり回って、中川先生も駆けずり回って、いろいろなところとコンタクトをもって、つながりを持ってやっていかれたのだろうと思いますが、今度は、それで実践して現れるのは子どもの姿です。その子どもが変わっていく変容ぶりを今度は学校の学級担任、具体的に言えば学級担任に伝えていかないといけないという仕事も一つあるかと思うのですが。そのあたりは、どうされているのですか。今の状況を見るだけで、忙しきでいっぱいだろうと思うのですが、どうしてらっしゃいます。

○加藤校長

それは、管理職の大きい仕事かなと思っています。毎日、毎日、朝、職員相手に語っても効果がないので、ここぞという時に、まとめて語りはするのですが、基本は、中学校の場合は、週に2回ほど会議を設けています。生徒指導部会と教育相談部会。教育相談に関しても不登校、もしくはそれに近い生徒に対して、どう対応するかということで、管理職であったり、全体のまとめ役、各学年の教育相談担当と情報共有をした後、こういう方向性でやっていこうとか、こういうことを他の先生方にも伝えてくれというところで、私の方がいろいろお願いをしていく。当然、頑張っているところはしっかり褒めていながら、ちょっとここは働きかけが足りないのではないかということ、うまく伝えるようにという、その作業を繰り返しやっています。その会に当然教頭もいますので、自分が言ったことがちゃんと伝わっているか、処理されているかというのが、教頭の方に、ある程度任すというようなことをしています。

後、少しだけ話が違いますが、私は学校の様子をぜひ、保護者、地域の方、そして不登校の家庭にも知ってもらおうということで、学校の様子をホームページの方に毎日写真付きでアップをしていて、いつでもどうぞという形で、こういう楽しいことがあるのだったら、来てみようかと言って、そういうふうなメッセージは送っているつもりです。以上です。

○宮崎部長

横展開ということがありましたが、学校の方で、他の学校、常に取り組んでいる学校がありましたら、フューチャールーム、その様子が分かるようなこと等があればお願いできますか。

○上田学校教育課長

まず最初に、実はステップアップルーム事業なのですが、ちょっとこの仕組みづくりというのは、私が全部やらせていただいた中で、一番のポイントは人でし

た。まさに今、言われた通りです。SSRとSURの大きな違いは、やはり、退職された管理職の方をぜひやってもらうということで、中川先生も、もと教頭先生で、鴻南と小郡についても教頭先生がされております。そのやられた成果、フューチャールームをものすごく、教頭先生、まとめてやられているので、そのまとめられたことというのは、あれを見たら、やってみようかなというふうなことを、校長会等でですね、最初、今年フューチャー授業を始めて、岩政校長も、4月の学校はじまる前から、これをやりたいということで、スタートされたのですが、やはりですね、これを、フューチャールームのことをちょっとずつ好事例を校長会で、市教委でお伝えする中で、私もやりたい、こっちもやりたいということで、好事例をしっかりと、アピールするというのが一番の横展開かなと思っております。

校長先生もということなのですが、やっぱり、いろいろなものを動かしてもらうには、教頭先生の力もすごく重要で、今後は教頭会でも、大内中学校、そして大歳小学校さんの事例をしっかりとアピールしながらやっていく、そして、後は社会教育課とも連携をしながら、地域の間でも発表されて、私が全然知らないところで、その話をした時に、地域の方が、私も手伝いたいのですが、どこに行ったらいいということも言われて、繋いだこともあります。いろいろなところでアピールしていくことで、この輪がオール山口でつながっていくのかなというふうに感じております。

○山本委員

岩政校長先生、地域の輪というのは、どういうふうに広げていらっしゃるのか。

○岩政校長

コミュニティスクールなのです。それがやっぱり最大の私たちの強み、持っている武器なのですよね。やっぱりすごくありがたかった、タイミングよかったのは、感染症予防対策が去年の5月でボンと明けて、そこから一気に今まで淀んでいた、止まっていた流れが、急激に学校に押し寄せて来た。要は地域の人たち、来たいのだなというのは、話していたらよく分かったのです。そこは地域コーディネーターがどんどん学校にいろいろなことでも言えだしたというふうなことがまずはスタートですね。やっぱりそんな中、私は基本的には、すぐ仲良くなったら、次は何をしようか、次は何をしようかというふうなことを、やっていく中で、実はこういう人がね、特に民生委員さんたちは、守秘義務を持っておられるということもあったので、実はね、こんなことで困っているのですよというのを言った中で、先ほどの、私の今年の流行語大賞ナンバーワンですが、私我慢ができなくなった、と言って翌朝来られました。すごくありがたい言葉だなというふうに思ったので、そういった方々、やっぱり学校の中を見てもらう、子

どもたちの現状を知ってもらう、やっぱり文面ではない、口頭ではない、生の姿を見てもらうということが、すごく大事なかなと思いましたので、実際に民生委員さんも、家庭教育アドバイザーさんも私、学校の中を一緒に歩きました。

その子たち、今、こんななのです、あの子、今、こんなだけど、こういうこともあるのですよというのを、一人ひとり説明をしながら、1時間かけて、回ったということも一つありました。

○宮崎部長

ありがとうございます。角川委員さん、お願いします。

○角川委員

一生懸命、学校の方でしてくださっているのは、本当にすごいと思うのですが、そもそもさっき、岩政先生が言われていた、今の子どもが疲れているということが、すごい非常に、こう、今の子どもたちは疲れているのだなあとというふうに。本来子どもは疲れてないというか、元気なのが本当なのだと思うのですが、やっぱり、何で疲れているのだろうと。今の環境を、取り巻く環境とか、SNSとかいろいろなこともそうなのですが、コロナもあって、やっぱり個になってしまっている部分で、そこがまた今再開されて、色んなことが時代の流れに、子どもたちは疲れてしまっているのかなというふうに。何かその、私は、ちょっと視点がずれるかもしれないけど、疲れな子どもたち、そういう子どもには保護者として、どうやったら良いのかなというのをすごく思いました。何か、今、小学校や中学校は、本当に手厚く、いろいろな支援もサポートもしてくださっていて、これはそこで終わりではなくて、高校になっても、今、非常に不登校はすごく多くて、中1ギャップ、小1ギャップがあるように、高1にもギャップがある。そして何かそこからまた大人になっていた時に、ポンと社会人になった時に、そういう子が、働けなくなったりとか、だからそもそもその強い子を育てる、そういういろいろな不登校にならないためにも、なにかその疲れな子どもを育てるには、小さい頃からのいろいろな体験とか経験とか、そういうのがやっぱりつながり、だからどうしてもそのコロナで数年間、止まってしまった。そういうものを、今からまた、やっぱり最後は人というのが何度も出てきたのですが、私もそう思うし、小さな子供には、私たちもう何十年も生きてきた大人にはたった数年かもしれないけど、子どもたちにとっては、そういう今まで生きてきた、短い期間の中でのいろいろな出来事に何か疲れてしまったのかなと思うところを、すごく今日、考えさせられました。

○宮崎部長

はい、ありがとうございます。鮎川委員さん、お願いします。

○鮎川委員

今、つながりということをお話されました。それに続けて、私も思い出したことをお話させていただきたいと思います。

今、吉村先生のお話とか、大内中学校さん、大歳小学校さんの発表、本当に、つながり、人というところで、今日通じているなというのを感じました。

今年度、私がたまたま耳にした例なのですが、不登校の中学３年生の男の子がいてですね、修学旅行があったのですが、担任の先生は、その子が修学旅行に行くものとして班編成とかいろいろなことを全部仕組んでおられたのですね。子どもさん本人はもうあまり行きたくないという気持ちだったらしいのですが、スーパーか何か学校とか、家庭ではない場面であつたまま同じクラスの子に出会ったときに、行く前提の話を話しかけたらしいのです。そしたらその子が学校に来るようになって、修学旅行にも行ったということなのですよ。人から認めてもらうとか、居場所があるということが、そういう形に表れたのではないかなというふうに思います。大内中学校さんも、その学校らしからぬ机だとか、そういう場面を大事にされている。それは、人とのつながり、ありのままの自分を受け止めてくれる人がいる。中川先生を中心とした、担当の先生方、それから担任とのつながりも大事にするというお話をされていましたが、結局そこに行きつくのではないかなと思います。大歳小学校さんの例では、やっぱり民生委員さんとか地域の方とのつながり。授業で評価されるわけではなくて、そうでない人とのつながりが、子どもたちを元気づけているのではないかなと思います。

もう１０数年前に読んだ本なのですが、例えば、テストで悪い点を取って帰ってきたときに、日本の子どもたちは学校で先生に叱られ、家に帰っても叱られて、だけど、ドイツの子どもはそうではないらしいのですね。悪い点を取って帰ったら家庭でお母さんが、よくつらいのに我慢したねと言って抱きしめるという話だったのですね。それがなにか私の心の中に残っていたのですが、もちろん悪い点を取って褒めるわけではないですが、やっぱり、ありのままの子どもを認める、そこからスタートしていくのではないかなというふうなことを思っております。そういう意味では、学校の体制として、大歳小学校さんの取り組み、それから子どもたちのメンタルのところの分析をして担任の先生とか、関係の先生方には、お伝えをして、対策を取られるという、その二つの両立をさせられる学校ができると素晴らしいのではないかな。もちろんすべてを、全部の学校でできるわけではないと思いますが、できることを、できる形でそれぞれの地域とか学校規模だとか、いろいろな要素がありますが、合わせた形で、取り組んでいけたら、山口市の不登校の子どもたちの様子もまた変わってくるのは無いかなというふうなことを感じました。

○宮崎部長

鮎川委員さん、ありがとうございます。

○中川教諭

はい、本当に一概に不登校の対応がどういうふうなものが良いかというのは、なかなか言えないと思うのですが、あるおばあちゃんがですね、自分たちは戦争中にいろいろなものが与えられなかったから、自分の子どもたちに、いろいろなものを与えてきた。そのまたお父さん、お母さんがですね、その孫にもそういう思いをさせたくないということで、いろいろ与えてきた。その結果、今の子どもたちがそういうふうな心がね、少し弱いという子が、生まれたのではないかということを書いているものを見たのですね。記事というか。そういう側面も確かにあると思いますけど、ただですね、本当に不登校になっている保護者さんがですね、良かれと思ってですね、全部手放して、良かれと思って準備されたのです。このパターンはですね、ほとんど良い結果にならない。今ですね、子どもたちが、本当によく帰りたいと言うのですね。帰りたいと言ったとき、帰りたいだけだったら、帰さないよと私よく言っているのですが、自分で決めなさいと。行くのも自分で決める。帰るのも自分で決める。というように自分で責任をもって決めなさいと言うと、よう決めきらないですね。でも徐々にこれ自分で、決めるようになる。そういう自己決定の場を、きちんと学校の中で、作っていくということが、やっぱり力強い子どもたちを作る日常になるのではないかなというふうに思っております。

○宮崎部長

はい、ありがとうございます。佐藤委員さん、お願いします。

○佐藤委員

私自身、さっき名前を出していただいた、学芸大学で働いているのですが、たまたま今朝、吉村先生にうちの大学で、このフューチャールームの話をしてボランティア、1年生の学生だったのですね。80名ほど1年生がいるのですが、そのうち20名がやりたいと言って、そこに集まって、すごい割合は高いのですが、私がその中でも興味深かったのは、ちょうど去年、入試で入ってきたときに、面接で、自分自身は不登校だったというふうに語っている学生が何人か含まれていました。毎年、入試の時、全員面接するのですが、その時の受験生のうち数名は自分の不登校の経験を語るんですね。中川先生の事例で出てきた松風館もそうですし、他のそういう通信制とか定時制から先生になりたいと受験してくる子が結構いて、そういう子たちというのは必ずその途中に関わってくれた先生とかの思い出を語るのですよね。なので、不登校はそんなに悪いことではないというか、行けなかったという期間に、どんな人と関わって、自分が、どう行けない期間を過ごすかということが、その子にとっての学校というものの意義を決めていくのではないかなというふうに思っているところです。そんな子が入学して大丈夫かなと心配するのですが、意外とそういう子は、入学するとすごく積極的で、充電

期間が長かったせいか、すごく張り切って学校行事を、すごく頑張るのですよね。そういう子たちが今回ボランティアとか手を上げています。やっぱり学校に行けないという経験をした学生とか、あるいは自分は、そういう経験はないけど、今回のこの授業を通して、学校になじめない子どもたちと関わった経験をした学生たちが将来教員になっていくことというのが、山口市とか、山口県にとって、教育界にとっては、貴重なのではないかなと思って、このフューチャーという言葉が、学生にとってもフューチャーの授業になるといいな、なんて今日ちょっと話を聞きながら思って、ちょっと本論とはずれるのですが、今日タイムリーにそんなことを思いました。ありがとうございました。

○宮崎部長

佐藤委員さん、ありがとうございます。佐々木委員さん、お願いします。

○佐々木委員

今日は、いろいろな、動画を含めてプレゼンテーション、見せていただいてありがとうございました。

学校というのは、人工的に作られているところがあって、我々、学校に慣れているからそれが自然なものというふうに捉えがちなのところがあるのですが、近代の産物というか、工業モデルにもとづいて作っているの、時間に非常にうるさいとか、同じ決まりを守るとか、その良さもあると思うのですが、時計のない、時間に縛られない生活をしたとか、スローライフとか、机とイスではないような、寝転がるとか、食事のあとにですね。というようなこととか、そういうふうに捉えると、学校そのものが、いろいろな種類のものを用意しておいて、学校に自分を合わせる側面も大事だと思いますが、それぞれのその時の思いとかエネルギーレベルとか、そういったものに学校側が、広い意味で学校側が合わせるということの大事さというのを、今日のプレゼンテーションを見させていただいて感じました。

また、最近プランディングというような言葉もありますが、誇りをもって自分たちの取り組み、後ろめたさを感じてというような時代でもないと思いますので、誇りをもって、ステップアウトして、そしてステップアップするとか、というような感じで、誇りを持てる、不登校に変わる名前を数年後の我々が日常的に使っているというような、あるいはそれぞれの学校で、今、ステップアップルームであったり、フューチャールームであるのですが、そういった名前を持った教室空間、というか学習空間とか、それがホームページを見ると3分くらい動画で上がっていて、もちろん写真もいいのですが、なにか正々堂々と誇りをもって市民にも、そしてそのプロデュースに子どもたちも関わってみたい、そんな状況がまたさらに進むといいなというふうに、これは希望というか、個人的な思いでもあるのですが、感じた次第です。どうもありがとうございました。

○宮崎部長

佐々木委員さん、ありがとうございます。山本委員さん、お願いします。

○山本委員

文科省のＣＯＣＯＬＯプランですね。あの３つの柱の中に、学校風土の見える化というのがあるのですが、なぜここで、学校風土という言葉を使ったのかというのが、私も今日ここに来るにあたって、不登校について、ずいぶん勉強してきたのですが、本当、これ、よく分からなくて、ぜひここで、教えてもらいたいなと思っております。

○中川先生

佐々木委員さんからも、未来はそんなこととは別に、マイナスイメージではないというお話がありましたね。昔は例えば不登校の子を登校拒否とかと言っていた時代もありましたが、それが不登校に変わって、今後また良いイメージのものに、変わっていけばいいなというふうに思うのですが、私も長い間、ずっと教員生活をしてきて、いまだに、私が新規採用だったころと、まったく変わっていない学校ってあるわけです。ところがそれが、これだけ激動する、その変化する社会と、照らし合わせたときに、果たして、私たちが持っている、その指導観であったり、学校観であったり、いろいろなものが、本当にそれでいいのかということを、問い直してみないとですね、子どもたちは激動する世の中で生きているのに、学校で、まだチョークを使って授業して、紙のプリントが山ほどくると、ところが子どもたちは家に帰ってですね、タブレットでいろいろな情報がすべて入ってくる。「先生、間違っていることを言っていない？」と、実は私、本当にクラスの中でですね、子どもたちがタブレットで、瞬時にいろいろなものを調べて、先生、それ違いますよというようなことも、出てきているわけです。だから、例えば規則でもそうですし、いろいろなものが、本当にそれでいいのかという見直しをしていくことが、その不登校の捉え方を含めて、変わってくる要因になるのではないかという意味で、学校の見える化というのが上がっているのではないかなというふうに考えております。

○山本委員

それを風土と呼ぶ、あえて呼んだわけですね。

○中川教諭

ではないかなと、もちろんこれは、本当に私見で正しく認識しているわけではありません。

○山本委員

この場所、ここで、風土と使うのがなにか違和感がありまして、なんでかなとずっと考えていたのですが、分からなかったのです。

○中川教諭

中身を見ると、子どもたちを客観視するいろいろなアンケートを使って、子どもたちを客観視することというのが出ているのですが、ただ、本当になぜここで、学校風土という言葉が使われたかというところを考えると、その後に、生徒の力でもって、学校の規則を見直すというような例が出てきていますので、そういう、昔ながらの考え方ですね、そこを刷新していく必要があるのではないかなという意味合いがあるのではないかなというふうに思います。

○山本委員

ありがとうございます。

○宮崎部長

その他、ありませんでしょうか。

ここで教育長さんもコメント等がいただければ。

○藤本教育長

今日、午前中、県教委の都市教育長会の会長ということで、不登校対策についての人的措置と、それから予算措置について、今日はお願いに行ってまいりました。県教委もかなり危機感を持っておられました。そういった中で、今日3名の皆さんの発表、すごい、熱いものをすごく感じて、これは前向きにできるなという思いがしました。特に、大内中、大歳小の取り組みというのは、私は、全国でも先進的な取り組みだというふうに思っておりますし、これを全小・中学校に広げていったらさらに良くなるのではないかなと思っています。

しかし、その中で、さっき、山本委員さんも言われたように、校長のマネジメント、リーダーシップもあるのですが、パッション、情熱というか、熱い思いが無かったらやはり伝わらないなという。それはコミスクであり、小中一貫であり、全てそれに通じるのかなと思いました。その子どもたちのために、熱い思いをずっと盛り上げるには、私たちの責任かなということで、今日、改めて思いました。いろいろな取り組みもありますが、やっぱり未然防止というか、早期発見、不登校の未然防止なくして、不登校の対策は無しというふうに、いろいろなフューチャールームとか、ステップアップルームとかやっています。でももっと根幹的なことをやらないと、確かに私は減らないだろうなというふうに思っています。

そういった中で、今日の話の中で、やはり教員と子ども、保護者と認識のずれということで、今日はいろいろな方々がスクールカウンセラー、スクールソーシ

ャルワーカー、専門員を交えてのいろいろな多面的な角度で、原因を究明する、これはやっぱり重要なことかなと思いました。

それと、今日、吉村指導主事が発表しましたが、魅力ある学校づくり、私はやっぱり授業が根幹だなというふうに思っていて、そこを私たち今年何とか変えたいと。やはり学校全部を回った中で、寝ている子がいるのですね。つらいのだと思います。分からないのです。でも頑張ってきているのですよね。やはりその辺を変えてやらないと、学校というのは変わらないかなと。今、私たち、その中で、認知能力、非認知能力、本物の学力、これを育てて行きたいな。その先に、先ほどありました、問題を乗り越える力、これをやっぱり引き出してやらないと、それは学校だけではだめで、やはり、いろいろな地域といろいろな関わりの中で体験をしたり、それはやはり、親子のつながりですね。そこを私、一番根幹であって、やはり良さを認めて、愛情深く接する。だけどその中で、やっぱりダメなものダメだということの厳しさとか、そこは最近変わってきているのかな。ただ優しいだけでは子どもは育たない。何もかも言えば全部やってくれる、そうではないのだと。そこを両方育てていく必要があるかなと思います。

最後はやっぱり、保護者の支援。これもやっぱり重要なかなと思います。私は、昔、担任をしていた時に、ある不登校の子がいて、お母さん、一緒に頑張りましょうと言うふうに言ったら、母さんは、「私は頑張っています、でもどう関わっていいか悩んでいるのです。」、ここに本質があるなとその時思って、とにかく寄り添おうということで、うちも社会教育課を中心として、いろいろな対応をしています。とにかく、医療機関とか、いろいろなものを踏まえて、とにかく関わっていく、そして私なんか、そういった中に入って行って、話しかけをしてみたいなと、本音を聞きながらいろいろな子どもたちに関わりたいたいなと思っています。先日は、フリースクールのそうめん流しのところに、私も上田課長と一緒に行って、不登校の子と話をしてすごく仲良くなった。純粋に30分くらい話をしてみて、でも将来の夢とか思いを語ってくれて、そこにあるな、いかにその子を認めてやるかなというふうに思いました。

そういった思いで山口、教育を進めていきたいなと思います。ありがとうございました。

○宮崎部長

ありがとうございます。もう少しお時間ありますが、もう一言という方、ありましたら、よろしくお願いいたします。

○鮎川委員

未然防止という観点から、子ども居場所はどう作るのかということが大事なのだろうと思います。不登校対策として、フリースクールだとか、あすなろ教室の中で居場所をと言いますが、本来の子どもの居場所は、学校の中とか、家庭にあ

るべきだと思うのですが、それがちょっと足りないところがある。子どもによって、抱えているものが皆違いますから、そこをどういうふうに受け止めて、子どもに自信を付けさせるかという、そのところが、何か今、コロナのこともあって、活動が寸断されたりとか、十分に時間をかけられなかったりとか、本当だったら、子どもたち同士で、いろいろこう話し合いをしながら、意見交換をしてから、時にはちょっと感情的になることもあるかもしれませんが、その中で、自分の感情をコントロールする力だとか、それから人の意見を認めて自分の意見等を盛り上げていく力だとか、そういうことが、今ちょっと減ってきているような気がしています。では、それを増やせばいいのですが、時間的なこともありますし、今まで子どもたちが育ってきているコロナの間の活動自体はもう変えることができませんから、ですから今までと同じ指導ではなくて、そういうところが不足している子どもたちに対して、どんな指導をしていったらいいのかという、そこを考えて取り組んでいく必要があるのではないかなというふうなことを感じています。すいません。もう現場を離れていますので、ちょっと今の現場と勝手が違うのかもしれませんが、ちょっと横から拝見させていただいて、そんなことを感じております。

○宮崎委員

貴重なご意見をありがとうございました。皆様、他よろしいでしょうか。

○藤本教育長

最後に、忘れてはいけないのですが、中川先生が、さっきステップアップルームの話の中で、卒業生が自身の不登校の体験を話しに来てくれるということがありましたよね。やっぱり感謝の言葉というのは、先生がずっとあきらめなくて、ずっと関わってくれたという部分があるかなと、そういう思いをずっと感じ取って、この子は多分、将来関わっていけるかな。来られないかもしれない、分からない、けどずっとあの先生が、僕のことを信じてくれたという思いで、ずっといると思うので。その子のメッセージは大きかったですよね、と思いました。

○宮崎部長

皆様から、様々なご意見、いただきましたが、もうそろそろ、予定の時刻となりましたので、最後に市長さんの方から、一言、よろしくお願いします。

○伊藤市長

今日はありがとうございます。特にまた、大歳小学校と大内中学校の先生方、今の時代、学校の先生、大変だなと思って。僕が子どもの頃の学校の先生はもっとおおらかに自由で、そんな教育論も持たなくて済んでいた時代だったなというふうに。たぶんそれくらい社会が成熟化して、学校のシステムももっともっと難

しくなっているのだろうなと逆に感じたところです。

児童・民生委員さんとか、社会福祉士さんとか、そういったプロフェッショナルが学校経営に参画するような時代になっているということ自体は、逆に裏返しては、ある種、社会病理を裏返している感じかなというふうな印象も逆に受けたところです。逆にその分だけ、学校、家庭、地域で、学校はしっかり頑張っているやと、逆立ちしてもすごいくらい頑張っているやと、よく分かりましたし、家庭は家庭でそれぞれ問題を抱えています。後、地域はどうサポートするか、ということが、やっぱり我々の課題かなと思っています。

今日は、地域交流センターの話もちらっと出ました。横山委員さんから。学校に行けない子が何とか家庭から地域交流センターまで出られるようになったよといったことが、それはとてもうれしい話で、地域交流センターが前身が公民館というふうな、実は社会教育法があって、公民館法があって、教育機関としての位置づけが明確だったのですね。今、地域交流センターという、いわゆる、教育機関から場所にセンターという、場所になってしまっている、というところが、一つのネックだと思っています。

当時は公民館長の公民館主事も社会教育研究所にいてちゃんと勉強して、教育者の一翼を担っていたという感じがあったのですが、それが学校の先生と連携して地域を支えていたという時代があって、今、それが全部希薄化しているというふうに、実は思っています。

それをもう一回、再考するのが、これからの行政の仕事かなというふうに思っています。やっぱり社会関係資本をいかに構築するかですから、これから。そこはやっぱりしっかりしていこうかなと思っています。

今の学校の先生ともプロフェッショナルもいますし、地域交流センターを中心とした、大いなるアマチュアも育てたいと思っています。

変な話ですが、僕が社会教育課にいたときに、公民館の主事とか館長さんに、天才バカボンのパパになってくださいと、それでいいのだと地域に向かって言ってください。そういう感じの主事がいるのですよとずっと言ってもらっていました。だから今の時代もやっぱりそれが必要なのかなと。

今、校長先生全部、背負いすぎているかなという気が若干、話からしたので、やっぱりその3分の1くらい、地域の方に。コミスクだけでなく、地域の需要、まだあると思うので、そこもしっかりやっていきたいというふうに思っているところです。本当に今日はいろいろ勉強になりました。ありがとうございました。

○宮崎部長

ありがとうございました。それでは以上を持ちまして、令和6年度山口市総合教育会議を終了させていただきます。皆さん、大変お疲れさまでした。

会議閉会（16時54分）

